御伽草子の美人描写（二）

――「光る」「輝く」「玉」をめぐって――

染谷裕子

一　はじめに

市古貞次氏は御伽草子の美人描写を大きく三つに分けた。[1] すなわち、次の三つである。

(1)「光るといふ語を以てする」方法

(2)「自然、月、花等に喩へる」方法

(3)「日本・外国その他の古往今来の美人に喩へる」方法

この中で、(3)については、前号で考察した。[2] 今回は、(1)について考察することにする。(1)は、美人の美しさを「光を放つように感じられる」とする表現であるが、御伽草子の中ではどのような語がこの類に属するか。「光る」に関連する語を（容姿美にかかわるものに限って）列挙してみよう。

名詞――光、月、日、玉、瑠璃、瑪瑙、紫磨黄金、鏡……

動詞――ひかる、かかやく、[3] てる

形容詞――きらやかなり、かかやはし、まばゆし

この中で特に多用されるのは、「ひかる」「ひかり」「かかやく」「たま」である。あとは散発的に見られる程度である。

そこで、「ひかり」は「ひかる」に含めて、①光る（光）、②「輝く」、③「玉」（瑠璃等も含める）の三つに焦点をあてて、これらの表現を考察していくことにする。「ひかる」「かかやく」と「たま」をその品詞及び意味からして一緒に考えることに問題があろうが、この三者は「玉光り輝く」のような形で、『宇津保物語』や『源氏物語』の中で容姿美を表す際に共に使われることも多く、その関係は密接であると思われる。これは同じく月や日にもいえるかもしれないが、後述するように御伽草子では特に「ひかる」「かかやく」「たま」とは「月」「日」にはない共通した重要な性格が見られる。この二つの理由から「たま」を「ひかる」「かかやく」を共に考察することにした。

また、これらの語を容姿美に限定して考察することも問題があろう。が、前号に引き続き御伽草子における美人描写を考察するという流れの中で、本稿をとらえていきたい。

但し、これらの表現は御伽草子に始まったのではないことはいうまでもない。ただちに『竹取物語』の「かぐや姫」や『源氏物語』の「光源氏」が想起されよう。が、伝統的な容姿美の表現方法が、御伽草子に継承されているものの、それが類型化などの形をとって変質してはいないか。それを探っていくのが主たる目的である。

今回もまた御伽草子を広く集めた『室町時代物語大成』十三巻（角川書店）四一八作品を対象とする。なお、美人を以てたとえる表現では男性を除いたが、今回は男性も含めることにする。

二　(1)「光るといふ語を以てする」方法と御伽草子の分類

美人の表現に限定した場合、(1)に属する表現は四一八篇中一五一篇に見られる。表①によれば三六%、すなわち三分の一以上に見られるのだから、美人例示の類（一五・六%）よりさらに頻出する表現と考えられる。市古貞次氏が美人を描写する表現として第一番にあげられたのもうなずける。市古氏の分類[4]と関連させてみると、特に「公家小説」の類に多いことがわかる。

さらに、「光る」「輝く」「玉」のそれぞれについてみてみよう。表②にこの三つの表現が表れる伝本の数と分類を対応させて示した。四一八伝本のうち、「公家小説」と「武家小説」に属する伝本は大体同じ位であるのにもかかわらず、「公

家小説」では「光る」「輝く」「玉」がそれぞれ同じ程度に伝本に現れるのに対して、「武家小説」では「光る」と「輝く」が「玉」に比べて現れる伝本が少ないことがわかる。相対的に見ると、「光る」については「公家小説」に多いが、「玉」については、「僧侶小説」「武家小説」に多いといえるのではないか。「僧侶小説」の「光る」の見られる伝本のうち、七本は「秋夜長物語」の伝本であることを考慮すれば、さらにこの傾向が強まるといえよう。

表①

	作品数	(1)の類
公家小説	73	39 (53.4)
僧侶小説	120	52 (43.3)
武家小説	75	26 (34.7)
庶民小説	39	16 (41.0)
異国小説	24	5 (20.8)
異類小説	72	13 (18.1)
その他	15	7 (46.7)
合計	418	158 (37.8)

表②

	光る	輝く	玉
公家小説	23	20	21
僧侶小説	21	28	30
武家小説	7	8	18
庶民小説	11	4	5
異国小説	4	1	3
異類小説	6	4	6
その他	2	4	3
合計	74	59	87

「公家小説」で「光る」を容姿美として用いている伝本をあげてみる。

2青葉の笛　24あま物語　29雨若みこ　49いわや物語　50岩屋の物語　54うたたねの草紙　75扇合わせ物がたり　79おちくぼのさうし　92花鳥風月　93花鳥風月　99唐崎物語　107衣更着物語　140興福寺の由来物語　150小伏見物語　167桜の中将物語　182志賀物語　191しのびね物語　227住吉物語　335一本菊　339兵部卿物語　350伏屋の物がたり　415わかくさ　417わかくさ

前代の物語を改作したと言われる「岩屋」「落窪」「伏屋」「忍び音」「一本菊」「住吉」「若草」などの伝本が目立つ。ま

た、公家小説の中でも、他に比べて一読して文体が古色を帯びている「うたたね」「しのびね」「兵部卿」にも見られることから、「光る」は擬古物語にとっては美人を描写する重要な表現であったといえまいか。

一方、「武家小説」で「玉」を以て美人描写をする作品をあげる。

16あきみち　45伊吹山酒天童子　48岩竹　77大橋の中将　165さくらゐ物語　208浄瑠璃物語　209浄瑠璃御前物語　210浄瑠璃十二段草子　215鈴鹿の草子　289てんぐのだいり　325はもち　326はもち中納言　374堀江物語　375堀江物語　385まんじゅのまへ　394むらまつの物かたり　399もろかど物語　400もろかど物語

同じ作品の伝本が多いので、断言するのは危険だが、御伽草子の歴史の中で比較的成立が遅い作品が目立つのではなかろうか。

三　各表現の考察

(1)「光る」「輝く」「玉」の共通項――生まれ出た赤子の美しさ

論を進めていく上でなるべく全体の状況が把握しやすいように、三つの表現の使用状況について示したのが、表③④⑤である。

表中、Aは「公家小説」、Bは「僧侶小説」、Cは「武家小説」、Dは「庶民小説」、Eは「異国小説」、Fは「異類小説」、Gはその他を表す。数字は『大成』の作品番号、複数例ある時は（　）にその数を示した。また、特に容姿の、ある部分を対象としている場合は、（　）内に「顔」「髪」等と示した。♂は、男性対象（赤子を除く）を表し、女性対象は無印とした（但し、赤子は除く）。★は誕生時（もしくはそれに近い時期）、☆は成長時の美を対象とする場合である。項目の表現はある程度まとめてある。従って、本文での用例と若干異なる（助詞・活用形等）こともある。

これらの表現が誰に対して向けられたかを示したのが表⑥である。（伝本の数ではなく全用例数を対象にした。）

表③ 「光る」「光」

◇光り輝く　⇨「輝く」を見よ
◇光るとはこれをいふ　A227　D356　D357　E♂☆366
◇光るほど
―なる○○　A★182　D355
―に　C♂☆5
―の○○　A★24　A★49(3)　D63　A★79　D★169　A★227(2)　B★329　B★330　355　D356(3)　D★357　D357(3)　D★358　D358(2)　D★359　D359　C403
―の（に）うつくしき（いつくしき）○○）　A★140　D★169　D★355　D★356
◇光るばかり
―に　B☆59　C♂165
―なる○○　A★167　B★267　B★401　A★417
―の　C★165
◇光るやう
―なり　F★348
―なる○○　D355　D356
―に（て）D34（面）　A★50　A191（顔）　B224（かたち）　B★267　A♂339（かたち）　A350　G377
◇あたりも光る
―御かけ　A♂75　A♂92　A♂93　A♂107
―ほどに　A☆99(2)
◇かたはら光る
―ばかりに　F252
―ほど　A227
◇月に光りあふ　A♂2　（髪）
◇光り黒みたる　B♂401　（髪）
◇夜光りけん玉　A♂191
◇光
―出るばかりに　F☆354
―（の）出るやうに　D☆355　D♂355　（かたち）
（月の）―さしそふ心地　A☆50　A♂☆167　B☆329(2)　D☆356　D☆358　D☆359　F391　A☆415
―さします心地　A☆♂29
―そひ　A☆54　A♂☆191　A191　C216
―まし　E♂☆35　B☆330
―まさり　F☆284　A☆227　B☆330
顔の―　D34
月に―をそへる　D297
月の光に―そへたる心地　A335
月の―に異ならず　D357
姫の―に照らされ　B345
身に―ます　B345
身に―おはします　E♂☆370
身より―を出す　C259
身より―を放つ　B♂405　B★345
◇威光あたりを照らす　B21　B22
◇玉の光　⇨「玉」
―ますがごとし　C374　C375
―あるに似たり　D♂397
◇月の隈なき光　B♂12
◇彦星の光　F♂303
◇夜光の玉　⇨「玉」
◇世の光　A♂191
◇我家の光　B♂9　B♂10　B♂11　B♂13　B♂14　B♂15

表④ 「輝く」

◇輝く
—かせたまふ　C★45（かたち）　C♂☆45
—きて　A♂148(2)　C♂344
—く　B♂330
—く心地　A191(2)
—くほどなれば　F253
—くほどの○○　A★50　D178　G♂250
—くほどの気色　A50
—くやうに　A☆79
◇あたりも輝く
—輝き　A168　A197(3)
—輝きわたりける　B378
—輝く○○　A★99
—輝くばかり　C★45　B120　C215G★387
—輝くばかりに　A25　C♂72　A268
—輝くばかりにて　A25　A150　A197　C216
—輝くばかりなる　G387　B★390　G★386　C★395
—輝くばかりなり　B40　A49　D55　A182　B308　D312　E☆♂366F398
—輝くばかりの★　B66
—輝くほどなり　A335　C264
—輝くほどなる　A★148
—輝くほどなれば　A185
—輝くほどに　A79　B★121　B236
—輝くほどの　C★5　B21　D55　B120　B180G★386
—輝くやうなる　A49
—輝くやうに　B117　A216
◇あたりほとりも輝けり　A22
◇光り輝く
—輝き　B★120★121　A♂191　G302　B☆401
—輝きて　A♂191　D355
—輝く　F♂248
—輝く○○　B★67　A★99　D178
三日月の—輝く姿　A107
—輝く玉のきず　A♂75　A♂92
—輝くばかりなり　G☆302
玉のごとくに—輝くばかりなる　B★378
—輝くやうに　A♂☆150
◇玉輝き　B♂382
◇輝く玉　F★284「たま」
◇隈なき月に輝き　A♂3
◇日月の輝くよりなおたえなる姿　B♂274
◇みねのいはほもみなすいしやうのごとく輝き　B★121
◇禁中を輝かせ給ふ　B♂405
◇御堂のうちも輝き　A350
◇ともし火に輝く　A171

表⑤ 「玉」

◇玉の
—男　B★364
—女　G328(4)
—子　B★275
—姿　A96
—胸　A148
—かほばせ　A197
—かんざし　A♂2　A75　A78　A92　A93　A107　A140　B195　E244
—びんづら　C289
◇玉に似たり　B37（胸）
◇玉のごとし
—ごとくになりにけり　D♂397
—ごとくにぞわたらせ給ひける　A★322
—ごとくに光り輝くばかりなる○○　B★378
—ごとくなる○○　B★59　A★79　B★127　B★174　B★181　C★215　B★226　B★274　★284
◇玉の光⇨「ひかる」
—あるに似たり　D♂397
—ますがごとし　C374　C375
◇玉のやうなる
—御かたち　A416
—○○　B★4　B★41　B★67　C★77　F★90　B★97　B★115　B★117　D★144　B★155　F★249　B★266　G★302(2)　B★319　C★325　C★326　E★366　C★385　A★416
◇玉をあざむく　C16（はだへ）　B★127
◇玉をのべたる
—肌へ E♂35
—○○　D★20
—（が）　ごとくなる○○　B★27　B★142　A★148　B★173　B★174　B★177　C★208　C★210　B★224　A★238　A★239　A★268　B★274　B★275　F★284　D★321　C★374　C★375　C★399
—ごとくなるに　A50
—ごとくにて　D★359
—ごとくの○○　A★44　B★181
—（が）ごとし　A★44　A★148　A148（胸）　C★394
—やうなる○○　A★148
◇玉をみがく
黄金の—みがきたるごとくなる　B★86
—みがきたるに異ならず　D321
—みがきたるやうにて　C★400
—みがける御かほばせ　D321
—みがける○○　B★141
—みがけるごとくなる○○　A★199

表⑤ 「玉」（つづき）

◇みがける玉のごとく　C★45　A★29　F★249
◇玉鏡をみがきて　A♂191
◇玉輝き、まばゆきまでぞおぼえける　B♂382
◇輝く玉　F284
◇さんごの玉　G302
◇手の上の玉　F★252
◇光り輝く玉　A♂75　A♂92
◇夜光の玉　C♂165　B★345
◇夜光りけん玉　A♂☆191
◇紅玉（白玉）のはだへ　B195　B195
◇瑠璃のごとく光り黒みたる　B♂401（髪）
◇瑠璃をのべたるごとくなる　C★48　G316（手）　B★331
◇瑠璃の玉をみがきたてたるごとく　C209
◇十はら十の指までも瑠璃をのべたるごとし　F217　A185　C209　C♂209　F324　C325
◇十の指までも玉をのべたるふぜひなり　F323
◇瑠璃めなうのはだへと申すともこれにはすぎじ　B401
◇御はだへは水晶の如く照り勝り給ふ　B♂401

表⑥

	赤　子	男	女	合　計
光　る	35 (26.9)	34 (26.2)	61 (46.9)	130
輝　く	21 (23.9)	17 (19.3)	50 (56.8)	88
玉	70 (56.9)	17 (13.8)	36 (29.3)	123

男女の別はさておき、うまれたばかりの赤子に対して、これらの表現が多く使われることがわかる。特に「玉」は六割近くが赤子に対して使われている。表③④⑤の中で★を付したものがこれらにあたる。

○ひかるほとの、ひめきみ、いてき給ふ（49いわや物語）

○アタリモ、曜ハカリノ、男子ヲ、誕生セリ（66恵心僧都）

○玉をのへたる、ことくなる、わうしにて、おはします（37あみだの本地）

ただ、こういえば、かの『源氏物語』の「玉の男皇子」が即座に浮かぶように、これらの表現は決して御伽草子に始まったことではない。しかし、表③④⑤で★印の付されたものを見ると、これらがかなり類型的に用いられていることは指摘できるように思う。誕生時の「光る」等の表現で最も多いパターンはこれらの語を含む連体句である。すなわち、「光るほどな

る○○」「光るほどの○○」「光るばかりなる○○」「光るやうなる○○」とか、「あたりも輝くばかりなる○○」「光り輝く○○」とか、「玉のごとくなる○○」「玉のやうなる○○」「玉をのべたるごとくなる○○」「玉をのべたるごとくの○○」というような表現である。また、これらはさらに、前に「取り上げてみれば」というような表現、あるいは後に「まうけたり」「いできたり」のような表現が続くことが多く、かなり類型的な一連の句をなしていることが多い。

○ひかるほとの、ひめきみを、まふけ給ふ（357文正草子）

○玉のことくなる、わか君いてき給ふ（59浦風）

○とりあけまいらせけれは、ひかるほとなる、わかきみにて、わたらせ給ふ（182志賀物語）

○とりあげ、見たてまつれば、たまのやうなる、太子にてましませば（41伊豆國奥野翁物語）

ところで、これらの誕生時に見られる表現は、特に「光る」と「玉」についてそれらの見える作品の分類によって違いが見られるように思う。すなわち、表③及び⑤を見ると、表中Aの「公家小説」やDの「庶民小説」（といっても多く「文正草子」の諸本）は「光る」を、Bの「僧侶小説」やCの「武家小説」では「玉」を用いる傾向がある。「文正草子」の五つの伝本では誕生時以外にも「光る」を多用するが、「玉」が出てくるのは江戸前期の写本（359）の一例のみである。

また、下接する語に注目すると、ある共通項が浮かび上がってくる。品詞上の問題があるので、まず動詞と名詞を分けて考えてみる。

「光る」「輝く」について、表③と④を見ると、その多くに「やうなり」「ばかり」「ほど」といった語が下接していることに気付く。中村明氏によれば、比喩表現を大きくとらえると、比較を表す「ばかり」「ほど」も直喩表現の一種と考えられるという。[5] これによれば、「光る」「輝く」は美人描写として用いられる場合、直喩形式で用いられることが多いといえる。特に「光る」についてはその傾向が強い。

一方、名詞「光」「玉」はどうだろうか。「玉」は「やうなり」「ごとし」「―に似たり」などの直喩形式が見られるが、「光」は「―心地」などがあげられるくらいであまり多く見えない。「姫の光に照らされ」「身より光を出す」等は比喩ではなく事実といった方がいいかもしれない。「光ます」「光そふ」などは美しさを「光」と言い表したものなので隠喩の

一種であろうが、これとても意味の拡大であって比喩という意識はないかもしない。

また、「玉」も「玉のかんざし」等の隠喩の形が見えるが、それほど多くはないし、決まり文句を成していることが多い。

気になるのは次のような例である。

○〔梅若公〕一寺ノ老僧、若輩、春ニヨクレタル、一木ノ花ヲ見テ、ヨソニ散ル、心チモナク、中秋ノ月ノ、クマナキニ、皆我家ノ、光ヲ争ナル風情ニテ候ヲ、此御所ノ御様、余ニユルス方ナク、御渡候程ニ、管弦数奇ノ席ナラテハ、御出モ候ハス……（9秋夜長物語）

○〔よも太郎〕我がむすめには、七夕はかりにても、かゝる彦ほしの光は、まちえてはと、なかめけるも、ことわりに見へ侍るそかし（303ねこ物語）

○さるほとに、中納言うせ給ひぬると、うへも、きこしめして、あさましく、世の光、うせぬると、おほしなけかれ給て（191しのびね物語）

「玉」にも(4)で述べるように「光輝く玉」「夜光の玉」などの隠喩が見える。ただ、これらの隠喩は『源氏物語』等にヒントを得たものが多く、個性的なものとしては「秋夜長物語」の例くらいであろう。

以上のことから、「光る」「輝く」「玉」を用いる場合は直喩的表現が極めて多いことが特色としてあげられる。一部の個性的な作品を除き、隠喩的な表現は誰でもそれとわかるようなものに限られているといってよい。

(2) 「光る」「光」――時と共に成長した美しさ

表③を④⑤と比較すると三つの点が明らかになる。第一は、「光る」（特に「光」）が前述した誕生時以外に、対象人物の美しく成長した姿を描写する場合に用いることが多いということである。これは、「輝く」や「玉」には必ずしもあてはまらない。表③④⑤中☆印を付したものがそれにあたる。

○〔若君〕せいしんしたまふにそへて、誠ひかりまし、ゆゝしかりければ（35いけにえ物語）

○〔娘〕日にそへて、ひかるはかりに、をいたちければ（59浦風）
○このひめ君、月に日にしたかひ、あたりもひかる程に、おいたゝせ給ふ（99唐崎物語）
○〔若君〕此比はことさら、ひかりそひて、うつくしく、をひ出給へば（191しのびね物語）
○〔姫君〕いつきかしづき給ふほどに。いよいよ、ひかりまさりけり。（284鶴の草子）
○姫宮、御とし十三にならせ給へは、ひかりさしそふ、心ちして、いつくしき事、かきりなし（329びしやもん）
○〔若君〕せいじんにしたがつて、いよいよひかりおはします、いつくしきこと、かぎりなし（370法妙童子）

「光さしそふ心地」や「光ます」「光まさる」は成長の美を描写する定型句といってもよい。

第二に、「光る」はその対象のほとんどが姿全体であることがわかる。[6] その対象を特に「顔」や「髪」に限定する場合が見られるが9例にすぎない。

○いとけたかき上郎の、面はしろく、光るやうにて（34伊香物語）
○〔姫君〕いみしう、なきはれたる御かほの、いよいよひかるやうに、しろく、うつくしければ（191しのびね物語）
○〔若君〕せいしんにしたかひて、御かたち、ひかるやうにそ、見え給ふ（224硯わり）
○〔中将〕御かたちの、ひかるやうに、おはするを（339兵部卿物語）
○〔児〕たまのかんさし。くまなき月に、ひかりあいて。（2青葉の笛）

第三に「輝く」「玉」に比べれば、他の自立語との結びつきがそれ程強くない。特に動詞「光る」について、この傾向が大である。

さて、「光る」は赤子や男性にも用いられるが、その中心は女性の容姿美にあることが表⑥からわかる。大方が女主人公もしくは男主人公の妻・恋人であり、物語（あるいは挿話）の中で一番の美人であることはいうまでもない。

表⑦

	光る	輝く	玉
王族・皇族	10 (6)	9 (4)	10 (5)
公　　家	50 (33)	35 (29)	38 (13)
武　　家	1 (1)	2 (1)	13 (2)
豪族・長者	41 (31)	18 (10)	25 (10)
特定人物	6 (6)	5 (5)	5 (5)
そ の 他	22 (18)	19 (18)	32 (18)
総　計	130 (95)	88 (67)	123 (52)

☆（　）の数は赤子対象を除いたものを表す。

文正の娘たちのように優劣つけがたい美人はともかくとして、同じ場面で複数の女性に対して「光る」を用いることはない。

出自についてまとめたのが表⑦である。但し、御伽草子の時代設定は様々であり表のようにまとめることが必ずしも適当でないかもしれない。ただ、これによれば、「光る」の対象者は「公家」もしくは「豪族・長者」に多い。血筋のみならず、財力・権力あるものに対象が絞られているともいえそうだが、「豪族・長者」の例に含めた41例中27例は「文正草子」の諸本の例である。この作品の特殊性を考え、一方で「王族・皇族」にも注目すれば（「公家」と合わせると46・2％）、やはり「光る」の特性は「高貴性」にあるといえるのではないか。

一方「その他」に分類したものの約六割は、神仏の使者・天人・霊力を持つ狐等の化身・即身成仏などの、超人的存在である。この「超人性」もまた「光る」の特性であろう。

「姫君」「若君」に対して「女」「男」などと呼ばれる者に対しても「光る」を用いる例は見られるが、「高貴性」や「超人性」の応用と考えてよい。たとえば、物臭太郎は都での恋愛を機に「まめ男」に変身、恋愛を成就させるが、物語も結末に近いところで次のように「光」を用いる。

○其のちは、日々にしたがって。玉の、ひかりあるに、丶たり。をとこ、びなんのなをとり。うた、れんが、人にすくれたり。（397物くさ太郎）

そして、この後に、深草天皇の皇子・二位の中将の遺児であることが判明する。あるいは、次のように漁師の娘として生まれた浦風は次のように「光る」を以て表現される。

○日にそへて、ひかるはかりに、をいたちけれは、うらはのものとも、かゝりつる人、あまの子ともには、さうおふせさる、むすめにこそあるなれ（59浦風）

その後、その美貌から常陸守の妻となり、その子が高僧真如となる筋だが、その筋の途中で浦風は漁師夫婦の子ではなく龍女が腹をかりて出来た娘であることがわかる。やはり、その美貌はただものではなかったわけである。

次の二例のみが例外である。巫女および遊女を対象にしたもので、「高貴性」や「超人性」では説明がつかない。

○たんくわのくちびる、あざやかにして。せいたひのまゆずみ、ほのぼのと。山のはちかき、三ケ月。ひかりかゝ約、すがたにて（107衣更着物語）

○ひのくるれは。ひかりかゝやく、女なれは。けいぐわと、なつけたり（178さるげんじ）

共に「光る」の単独例ではなく「光輝く」とあり、「光る」よりも「輝く」に重点があるところから「輝く」のところで後述することにする。なお、前者は長々と美人描写が続く場面での用例である。冒頭にあげたように御伽草子において美人描写としては三つの用法があるが、第三番目の花鳥風月を以てたとえる表現の類に属するものといってよいかもしれない。すなわち、この場合美人を「月」にたとえる表現にあたるが、そこに「光輝く」が接続したものと考えた方がよさそうだ。なお、「衣更着物語」は「花鳥風月」の異本であるが、伝本四本のうち「光輝く」が見られるのは「衣更着物語」だけである。

それにしても気になるのは「文正草子」である。五伝本のうち江戸前期の一本を除くと「光る」が多用されている。先述した対象から考えれば、立身出世したとは言え「塩焼き文太」の娘達に「光る」を用いるのは異例のことである。この異例が狙いであったのであろうが、その狙いとは何か。後に姉が関白殿の子息、中将の北の方になり、妹が女御になることと関連した王朝的美への憧れか。あるいは、もう一方の「光る」の特性である超人的美としての表現か。いずれにしても娘たちに用いられるしつこいくらいの「光る」の多用は御伽草子の中でも異例である。(7)

そもそも「光る」とは何なのか。「光るとはこれをいふ」に注目してみる。

○中の君、三の君は、とりどりに、いと匂ひやかに、なべてのには、あらぬ、御けしきなれと、ひめきみは、いま一入しのひかちにて、ひかるなどは、是を申にやとそ、見え給ける（227住吉物語）

○さて、ひめ君の御きぬに、ゑいかさねのからきぬ、さくらのこうちき、くれなゐのはかま、たをやかに、きなし給へる、御すかたなとはけたかく、をくれたる、ところもなく、まことにめもおよばれす、ふてにも、いかて、つくすへき、ひかりなとゝは、これをそいはんすらんと、おほしめしつゝ、てんか、きたのまんところへ、参りたまふ（356文正草子）

○月日のかさなるに、したがひて、うつくしく、ねひとゝのほり給ひけれは、てん人も、かほとにはあらじと、あめわ

かみこの、人となれるかとて、あやしむまてに、見えたまふ、まことに、ひかるとは、これをやはいふへき、あたりもかゝやく、はかりなり（366宝月童子）

各用例の傍線部に注目すれば、「光る」美とは「おさえられた美」であり、「気品ただよう美」であり、「人間離れした美」であるといえるのではないか。後の二つについては、先述したように対象の出自からもうかがえる。この「光る」美の解釈については御伽草子にはじまったものでは決してない。

湯原美陽子氏は物語文学における容姿美を表す「光る」について次のように概説している。[8]

「この「光」をその源流を遡ってたどるなら神々の世界に行き着く。記紀を繙くなら、光輝く神々の姿と、その子孫の光る美を見つける……こうした私達の祖先の神々への憧憬は、物語文学の中に引き継がれ『竹取物語』に於けるかぐや姫の姿を見ればわかるように、仏説から光の要素も加わり、また人間としての美もそこに輝いてくるようになって、最早や神話の人物ではなく物語の主人公となってくる。……やがて『宇津保物語』になり、次第に人間性が成熟してくるのが、やはり、神々や仏の光を引き継いでいる。」

藤田加代氏はこうした容姿美を表す「光る」について「その主人公たちのまばゆく発現する超人性を表すもの」であり、「目もあやな光彩美であり、まばゆいほどに高貴で華麗な美」とする。[9]

先にのべた御伽草子の「気品ただよう美」、「人間離れした美」もまたこれらの伝統を引き継いだものといえよう。

ところで、先にあげた「おさえられた美」についてはどうであろうか。実は、これを裏付ける更なる用例は御伽草子にはない。

『源氏』以前の物語文学においては、先の湯原・藤田両氏の説を一般的なものと解釈してよかろうが、『源氏』については判断が分かれている。すなわち、『源氏物語』については、これらの伝統的把握の仕方の延長と見る藤田加代氏[10]と、その特殊性を指摘し、特に王権との関わりについて述べておられる河添房枝氏[11]に分かれる。

今その賛否については述べることはできないが、少なくとも『源氏』がそれ以前にない「光る」美の発見をしたことは否めないと思われる。御伽草子にはその美意識を受け継いだといいきれる用例はないにしても、『源氏』の表現の影響を

受けたと思われるものは散在する。先にあげた「光るとはこれをいふ」もその一つであろう。[12] 作品自体が『源氏』の影響を色濃くうけたものもある。市古氏は「一體に中世の小説の主人公の形容に光るといふ語が多く用ゐられるのも、竹取物語など以来見られるわが國の物語の傳統的な言ひ方であることも考慮しなければならぬが、やはり源氏物語の光る源氏が強く作用してゐると考へられる」と述べている。[13]

このあたりは、「光る」に限らず、御伽草子における表現の上で『源氏』の影響について検討しなければならないだろう。

「光る」の光源は、人そのものである。対象人物そのものが「光る」のである。稀に次のように月光の光を受け「光る」場合が見受けられるが、二例のみである。

○みれは、月かげに、ひかるほどの女ばう。下女一人つれて。たちやすらひて、ゐたりしかば。（403雪女）

一方、その光の特性について月、玉、朝日、星と関連付けることもある。

○〔王子〕御うふゆを、ひかせたまへは、いよいよ、ひかりかゝやき。十五夜の月の、やまのはを、さしいつる、ここちして（121熊野の本地）

○〔姫君〕ひたいに、かみかゝりて。月にあたりて見給へば。ひかりそへたるここちし、らうたく、くまなきありさま（335一本菊）

○〔姉娘〕まゆひたいなとの、あいきやうつき、さまさま、はなのにほひ、月の光にも、ことならす（357文正草子）

○とりあけてみ給へは、玉のことくに、ひかりかゝやくはかりなる、わかきみにてそ、ましましけり（378ぼん天）

○〔姫君〕ふよふのまなしり、あさやかに、にんにくのはだへ、たえにして、たまのひかりをますがごとし（374堀江物語）

○〔姫宮〕ひかりまさりて、あさひのいで給ふかとのみ、うたがはる（330びしやもん）

一〇頁の「秋夜長物語」や一二頁の「物ぐさ太郎」「衣更着物語」の例もこれらの類である。特に月（13例）または玉（9例）と関連する場合が目立つが全体としては多くない。その理由としては、先に述べたように別に花鳥風月にたとえる方法

が多用されたことと関連してくる。この問題については、稿を改めて論じたい。

なお、「輝く」と最も異なるのは「光る」場合は対象そのものが光を発することに中心がある点である。「輝く」のように対象が光を発して周囲が光るとする「あたりも光る」「かたはら光る」の例も見られるが少ない。

(3)「輝く」――流行の美人表現

表④をみてわかるように、「輝く」は「光る」に比べて特定の語と結びつきが強く、「あたりも輝く」という形が多用される。

○としの程、十七八はかりなる女房の、あたりもかゝやくはかり、この世の人にも、見ゑさりけり（215鈴鹿の草子）

○あたりも、かゝやくはかりに、たとえんかたなく、うつくしき、ひめ君の、ふつくゑにかゝりて、ふくめんして、御きやうをそ、あそはしける（268中将姫）

○とりおろしたてまつれは、あたりも、かゝやくはかりなる、いつくしき、おさあい人なり（387みしま）

○〔天一王の娘〕后たちゆき給ひ、さて見給ふに、まことに、あたりもかゝやく、ばかりなり、御すかたをみれは、秋の月。かたちを見れは、はるの花、何にたとゑん、かたもなし（40厳島の本地）

○〔年の程十六七とおぼしき姫君〕かたち、ありさま、かみのうへより、はじめて。をしながしたる、こゝちして。まゆびたい、うち物ごとにみがきたてたる、けしき。あくまで。けたかく。あひなりて。ゑにかくとも、ありがたし。あたりも、かゝやくほどなり。（335一本菊）

○……とよみたまふを見るに、あたりもかゝやくほとの、ひめきみなり。（55うばかは）

この表現は、ある分類に偏ることもなく、古い伝本から江戸の伝本まで幅広く見えることから、御伽草子の中では、典型的な美人描写であったといえよう。

なお、「輝く」のはあくまで対象全体もしくはその周辺で、対象の部分、たとえば髪や肌などが輝くことはないが、次のように顔に焦点を絞るものが若干（6例）みられる。

○〔姫君〕そのかたち、はなはだうつくしく、かゞやかせたまへば、ちゝはゝ大きによろこび、玉姫御ぜんと名づけつゝ、いつきかしづき給ひけり（45伊吹山酒天童子）

○〔二十余りの女性〕そのかたちをみるに、ようがん、びれいにして、かゝやくほとなり、かみのかゝり、うるわしう、さながら此世の人とは思はれず、あやしさは、かぎりなし（264俵藤太物語）

さて、八頁の表⑥から「輝く」も「光る」と同様に、その中心は女性の容姿美にあることがわかる。しかも、その傾向は「光る」より顕著である。そして、これらの大方は「光る」同様、物語中の女主人公や男主人公の妻・恋人にあたる最高の美人に用いられるのだが、次のような気になる例がある。

○めもかゝやく心ちす、女房三十人はかり、しろきはかまにて、なみゐたり（191しのびね）

○みめよき女ばうを、十人すぐり。あたりも、かゝやくほどに、いでたゝせ、みかどの御まへに、出しければ（236善光寺の本地）

すなわち、主人公格ではない人物、しかも複数に対して用いているのである。「光る」にはこのような例はない。これを問題点一とする。

出自についてはどうだろうか。一一頁の表⑦によれば、「公家」が中心であり「王族・皇族」と合わせれば「輝く」全体の五割を占め、まずは「光る」と同じく「高貴性」は指摘できよう。一方、「その他」についても、神仏や、その子、その使者、天人、鬼神、変化、即身成仏など超人的存在が大方を占め、「超人性」も指摘できよう。しかし、どこの誰だか記述されていない対象に「輝く」を用いる場合がある。

○あたりも、かゝやくほどの、上らうの。いきやう、くんじて、ざゞめきわたりたり。（180三人法師）

「三人法師」は三人の出家が集まってその懺悔話をする内容であるが、右は二番目の出家の懺悔話に出てくる。実は最初の出家の話から、この女性が誰であるか判明したのであるが、二番目の出家の話ぶりではあくまでも「高貴な女性であろうが誰だかわからない存在」である。先にあげた複数対象の例に至っては、個々の人物は誰だか不明である。「光る」についてはこのような例はない。謎の人物でも読者には分かる趣向であったり、出自不明のままであっても、高貴な人

物と結婚するなどして異例の出世をとげるなどして、物語の主人公もしくはそれなりの存在である。これを問題点二とする。

そして、「光る」に見られた「高貴性」の応用のような例は「輝く」にはない。これを問題点三とする。

現代語における「輝く」は「光る」に比べ光量の上でまさり、持続性という性格を持つ[14]。これは古典の世界についても同様と考えてよいと思われる。従って、『源氏物語』に見えるような「輝く」美が「光る」美よりさらに限定された対象に用いられる[15]といったような例が見えていいはずだが、その根拠となる用例が見あたらない。

用例が単独例であったり、短編ゆえ登場人物の少ないことが関連するからだろうか。ただ、「輝く」を用いる対象は大体各作品の中で主人公もしくはそれに近い最高の美人であることはいうまでもない。単に、「うつくし」等の形容詞で形容される場合とは明らかに異なる。例えば、「十二人姫」では、衛門督の十二人の美しい姫に対してそれぞれ美人描写が見られるが、「輝く」が用いられるのは、特に美しさのまさる「十一の君」と「十二の君」のみである。が、一方で気になるのは「鉢かづきの草子」である。嫁比べの場面で、鉢かづき姫に敗れた嫡子の嫁御前に対して「輝く」を用いる。

○ちやくしの御よめ御前は、じんじやうなる、御しやうぞくにて。御年のほと、二十二三計と、うち見えて。ころは九月中ばの事なれば。はだには、しろき御小袖、うへには、いろいろの御こそでめし。くれなゐのはかま、ふみくくみ。御ぐしは、たけにあまり。あたりもかゝやくばかりなり。

同じ場面で鉢かづき姫に対しては、美人や天人に例えたり、様々な自然の風物にたとえたりなどして、あらゆる美辞麗句をつくして描写しているが、「かかやく」は見えない。少し後の場面で、次のように出てくる。

○（鉢かづき姫を）いざや、のぞきて見んとて、のぞきみたまへば。あたりもかかやくほどの、びしんなり。みなみな、ふしぎにおぼしめして、何と申べき、ことのはなし。やうきひりふじんも。これにはいかゞ、まさるべき。とてもにんげんに、むまれなば。かやうの人とこそ一夜なりともちぎり。おもひでにせんと、人々、うらやみ給ひけり。

このような例が見えるのは、「鉢かづき」のみであるが、これを問題点四とする。

以上の問題点を整理してみよう。

（一）「光る」は単独の人物に用いるが、「輝く」は複数の人物にも用いる。

（二）「光る」は出自不明の人物でも、その後の情報が詳しく語られる対象に用いられるのに対して、「輝く」は詳しい情報がない対象に対しても用いる。

（三）「光る」を用いることによって、実はその人物が高貴な（または超人的）存在であることがわかる場合があるが、「輝く」にはそのような例はない。

（四）「光る」は物語中最高の美人に用いるが、「輝く」の場合はそうでなくても用いることがある。

（一）（二）から、「光る」を用いる対象に対して作者の思い入れが強いのに対して、「輝く」を用いる対象に対しては必ずしもそういえないことがわかる。さらに（三）（四）から、「光る」は外面的な美にとどまらない美人描写であるのに対して、「輝く」は外面描写に徹しているものといえまいか。すなわち、同じく類稀なる容姿美を表す「光る」と「輝く」ではあるが、前者はきわめて主観的な用法であり、後者はどちらかというと客観的な用法と捉えていいのではないか。一三頁の「光輝く」の用例もまた後続する「輝く」に中心があるとみれば、以上の傾向で説明が可能である。

また、この傾向は、美人描写に関して、「光る」が対象自体が光を発する点に中心があるのに対して、「輝く」は対象が光を発することによって周囲が明るくなる用法――例えば「あたりも輝く」のような――に中心がある点も関連してこよう。

光源が特に月、玉、ともし火に限定されたり関連したりすることもあるが多くはない。

○ちこのしやうぞくは、きんしや、きんらんをめし。たけなる御くしを、びんづらにゆひ。こがねのうちわを、もちたまふ御すがた、くまなき月に、かゝやき、てんにんの、やうがうかと、うたがわる（3青葉の笛）

○ひめ君は、ひはちに、むかひて、はいかきしてそ、おはしけるすかた、ともしひに、かゝやきて、いつくしなんとは、中々、申もおろか也（171狭衣の中将）

○ひめきみの御すかた、いつくしさ、まゆ、くちつきより、はしめて、あひきやうつきて、けたかく、みるたひことに、うつくしき事、かきりなし　たとへは、十五夜の月の、やまのはより、ほのかにいつるに、ことならす、あたりもかゝ

やく、はかりなり（182志賀物語）

○〔侍従の君〕御門さし入より、玉かゝやき、まはゆきまてそおほえける、人見えぬかたにて、たいめんし給、ともし火、ほのかに、空たき物、くゆりいてゝ、いとえんなり（382松帆物語）

(4) 「玉」――赤子の美しさの決まり文句と部分の美

表⑤を見ると「玉」も「輝く」同様他の語との結びつきが強く、類型的な表現が多い。殆どが先に述べたように「誕生」にかかわるもので、「玉のごとし」「玉のやうなり」「玉をのべたる」「玉をみがく」などで表現される。

○たまのことくなる、ひめきみ一人、いできたもふ（215鈴鹿の草子）

○とりあげ、見たてまつれば。たまのやうなる、太子にてましませば（41伊豆國奥野翁物語）

○十月と申に、御産のひもを、ときたまふ、うつくしき、たまをのへたることくなる、ひめきみにてそ、おはしける（238千手御前物語）

○御子取あげ、見給へは。玉をみがける、若君なり（141弘法大師御本地）

「玉」が「光る」や「輝く」と大きく異なる点の一つとして挙げられるのは部分の描写である。「光る」と「輝く」は対象全体の美を描写する場合が殆どで、共に九割以上を占める。顔や髪について「光る」や「輝く」を用いることはあっても稀であった。それに対して、「玉」は、顔、胸、髪、肌、手、指のような身体の部分について用いることが少なくない。全体の25％（31例）を占める。但し、赤子に関する用例は一切ない。従って、赤子を除いた男女の描写54例の半数以上を占めることになる。また、男性（7例）に比べて女性（24例）を対象とする場合の方が圧倒的に多い。すなわち、「玉」は女性の身体の部分の美を描写するといってよい。「玉に似たり」（胸）、「玉のやうなる」（顔）、「玉をのべたる」（肌・胸・指）、「玉をみがける」（顔）、「玉をあざむく」（肌）のような直喩的用法の他、「玉の」に身体の部分が続く形がある。これらは単独で用いることもあるが、「青黛のまゆずみ」「丹花のくちびる」などと共に美人描写の類型表現を形成することが多い。

○是にも、ひめ宮一人おはします。玉のやうなる、御かたちにて、ましませば。御ゆくすゑも、たのもしく。ちゝはゝの御てうあひは、かぎりなし。（416わかくさ物語）

○〔紫式部〕みだれてかゝる、びんのはづれより、かほのにほひ、うすぐもに、月のすきたたるがごとし。くちびるは、ふようのごとし。むねは玉ににたり。すがたは、そのふの中の花のゆふばへ、さきこぼれた、梅さくらのごとし。（37石山物語）

○いもうとの、風月は、もみちかさねの、二きぬに、こうはいの、はかまきて、しらゆきのはたへ、すきとをり、玉のかんさし、ゆりかけて（92花鳥風月）

○もとより、みめかたち、世にたくひなき、すかた、青柳の風にふけ、かいたうの、ねむれる花のよそほひ、せんけんたるまゆすみ、もゝのこひをふくみ、はたへは、玉をあざむくほとなりけれは（16あきみち）

○たてるすかたは、春の花の、あめに、ほころふことし、とをの、ゆひまても、たまをのへたるふせいなり（323はまぐり）

手指に関しては、特に「玉」を「瑠璃」に限定する場合が多く、「十はら十の指までも瑠璃をのべたるごとし」のような常套表現を形成している。「瑠璃」以外にも、「瑪瑙」「水晶」「白玉」「紅玉」なども見られ、特に「肌」の形容として用いられる。

○すかたを申せは、はるのはな、かたちを、見れは、あきのつき、十はらとをの、ゆひまても、るりをのへたる、ことく成（209浄瑠璃御前物語）

○あふきさしかさし、うちゑみ給ふ御けしき、あくまてけたかく、御くしは、柳の糸をみたせるかことし、さうへ、こほれかゝり、あいきやうみちて、ゆきのことくなる、御はたへは、すきとをり、十はらとをの、ゆひまても、るりをのへたる、ことくにして、一ところとしてみにくきところは、ましまさす（185しぐれ）

○〔花子の君〕るりをのべたる、ごとくなる。いとうつくしき、手をのべて、少将殿の、御手を引て、みすの内へ、入奉るに（316花子ものぐるひ）

○年二八はかりなる、御ちこの、御かみは、るりのことく、ひかりくろみたるを、かきなかしたまひて、御はたへは、すいしやうのことく、てりまさり給ふか、（401文殊姫）

ただし、「十はら十の指までも瑠璃をのべたるごとし」のような例は古い伝本にはあまり例をみない。「浄瑠璃」あたりが流行させた表現ではなかろうか。

全体の様子を「玉」で描写する用例は、赤子を除くと部分を描写するよりもむしろ少ない。「玉のごとし」「玉のやうなる」「玉をのべたる」「玉をみがく」等、赤子と共通する表現もある一方で、「玉の光ます〔ある〕」のように特有の表現もあるが、むしろこれは「光」の方に重点があるといえよう。また、「玉の女」「玉の姿」といった隠喩や、「光輝く玉」「夜光の玉」「珊瑚の玉」といった隠喩もみえる。

○〔光源氏〕ひかりかゝやく、玉のきす、いひちらさんも、なさけなし（92花鳥風月）

○〔玉千代丸〕しほた、つふりの。はげてけれは。夜光の。たまの。きずとて。みな人おしませたまひけり。（165さくらゐ物語）

○さるほどに、左衛門殿は、御せんをみそめ給ひしより、袖のうちの、さんごのたまと、いつきかしづき給ふほどに（302七草姫）

最後の例は最愛の人としてたとえる「玉」である。これを美人描写として入れるには無理があるかもしれないが、その愛情の理由の一つが類まれなる美貌であることが文脈よりうかがえるので含めた。同様な例は、赤子に対しても「輝く玉」「手の上の玉」といった形で見られる。(1)でも述べたが、極めて個性的な「玉」を用いた隠喩は見られない。

なお、部分の美を表す時に見られる「瑠璃」などによる形容は全体を対象にする場合は赤子も含めてめったに見られない。

ところで、「光る」「輝く」にみられた「高貴性」や「超人性」といった傾向は「玉」には見られるのであろうか。表⑦によれば、確かに「公家」に最も多い。赤子も含めれば、「王族・皇族」と「公家」の合計は「光る」や「輝く」の五割には及ばないものの四割見られる。「その他」については、神仏の使者や天人、化身などが多く見られる点も「光る」や

「輝く」と同様である。しかしながら、赤子の美や部分の美に特色がある「玉」に「高貴性」や「超人性」をみることに無理があるのではなかろうか。出自で特記すべきことは、「武家」が「光る」や「輝く」に比べて多いことぐらいであろう。

四

ところで、容姿美を表す「光る」「輝く」「玉」が全く出てこない作品とはどのような伝本なのであろうか。やはり気になるのは「公家小説」の類である。たとえば、「さごろもの大将」(170室町末写本)・「さごろも」(172寛永頃丹緑本)・「しぐれ」(183永正十七年写本)・「しぐれ」(正保頃刊本)等の擬古物語系統の作品にでてこないのはなぜか。「光る」や「輝く」は平安時代の物語文学の世界で容姿美を表す上で重要な語であった。一方ではこれらの伝統を継承しつつあり、一方では右にあげたような作品ではこの伝統は消えつつあることを意味するのか。同じく「公家小説」の「秋月物語」や「朝顔の露」や「小町双子」で美人例示は見られるものの「光る」等はでてこない。

そもそも美人例示と「光る」等の表現は共用されることはあまり多くはない。「光る」等の表現が見られる伝本の中で、同じ人物に対して美人例示を用いているものは一五一伝本中三二本にすぎなかった。美人例示に力を尽くした作品「恋塚物語」「姫百合」「ふくろふ」などの諸本には「光る」等はでてこない。美人例示よりもむしろ天人例示（五十本）の方が共用することが多い。これは「光る」等の表現の持つ性格が天人例示と共鳴するからであろう。

しかし、このような「光る」等の特性も、前代の物語と異なり消えつつあったといってもよいかもしれない。対象や場面に限りが見られ表現自体も類型化の傾向が強い。御伽草子の読者にとっては、古来の美人や花鳥風月を以て美人を形容した方がインパクトが強かったのかもしれない。

注

（1）『中世小説の研究』（昭30・東京大学出版会）406頁

（2）拙稿「御伽草子の美人描写――古来の美人にたとえる表現」（『調布日本文化』7号・平9・3）

（3）第二音は近世まで清音であったと言われる。御伽草子の刊本に清濁を表すものがあるが大体「かかやく」と清音で示すものが多い。但し便宜上、以下は漢字で「輝く」と表記することもあることを断っておく。

（4）（注1）前掲書70頁に示された「公家小説」「僧侶小説」「武家小説」「庶民小説」「異国小説」「異類小説」の六分類。作品によっては二つ以上の分類にまたがることもあるが、便宜上どちらか一方にいれた。なお、六分類に入れがたいものはその他とした。どの作品をどの分類に入れたか、拙稿「侍と候――広義の御伽草子の場合」（『調布日本文化』3号・平5・3）に詳しい。

（5）「直喩をあらわす言語形式と対比関係とに関する一考察」（『表現研究』9号・昭44・3）

（6）山口仲美氏は『今昔物語』の容姿・容貌に関する直喩表現を抽出し、特に「表現主体が、表現対象を総体的にとらえる場合」と「表現主体が、表現対象を部分的にとらえる場合」に分け、『源氏物語』では前者のみのとらえ方をし、仏典では後者のとらえ方が主で、『今昔物語』では仏典のとらえ方に近いことを指摘された。（『平安文学の文体の研究』昭和59・明治書院）これを応用させていただくと、「光る」はむしろ容姿美を総体的にとらえる場合の表現の一つといえるかもしれない。それに対して、「玉」は部分的にとらえる場合の表現の一つという違いがある。

（7）岡田啓介氏は「文正草子」の美人描写について「姫の装束・容姿を描写した本文の相違は著しいが、これは、それぞれの本の作者が原本にとらわれることなく、自由に腕を振ったことが原因していると思われる」（『文正草子の研究』（昭59桜楓社）と述べておられる。これは他作品についても同様である。にもかかわらず「光る」についての異同がないのはなぜか。「文正草子」の「光る」に特別な意味がこめられていると考えざるをえない。また、岡田氏は「文正草子」は茨城県内に伝わる「文太長者伝説」が源になっていて、その長者譚は「朝日さす夕日かがやく木の下に黄金千ばい朱千ばい」という歌と共に伝承されているという。この歌と「文正草子」の「光る」は何か関係があるのかもしれない。

（8）「源氏物語の容姿美――王朝容姿美に見られる美意識とスピリチュアリティの特性から」（『美の世界・雅びの継承』源氏物語講座7・平4・12・勉誠社）

（9）『「にほふ」と「かをる」』昭55・風間書房

（10）（注9）前掲書
（11）『源氏物語の喩と王権』平4・11
（12）「彦星の光」「夜光りけん玉」などがあげられる。
（13）（注1）前掲書。79頁。
（14）『ことばの意味1』（平凡社）・『基礎日本語辞典』（角川書店）・『類義語辞典』（東京堂）
（15）藤田加代氏（注9前掲書）は、『源氏物語』において「かかやく」が光源氏、藤壷更衣、冷泉帝の3人の容姿美に限定されていることを指摘されている。